

主催・東海大学文学部文芸創作学科
後援・月刊『望星』

小島ゆかり ◎歌人
辻原登 ◎作家
長谷川 權 ◎俳人



今年で第七回目を迎えた湘南連句座談会は、三人の選者の「発句」「脇句」「第三」に続けて、参加者が句を付けていく会場参加型の催しである。連句の楽しさを、実践的なアドバイスとともに味わう座談会の模様を再現する。

付きすぎず、離れすぎずに

前回の「御仏の巻」から、まる一年……。第七回東海大学湘南連句が、五月二十九日に湘南校舎十四号館で開催された。

今回も選者の小島ゆかり（歌人）、辻原登（作家）、長谷川權（俳人）の三氏が事前に詠んだ発句、脇句、第三に続け、参加者が句を付けていくという趣向である。初めに主催側を代表して、辻原より「挙句まで楽しい時間を皆さんと一緒に過ごしたい」という挨拶があり、長谷川から連句についてのミニ講座があった。

「連句は五・七・五の長句と七・七の短句を、交互につなげていく共同作品です。前句と合わせて二句一連として読み、付きすぎず離れすぎず、ことばの変化を楽しむ。簡単に言うと、漫才のようなことばの掛け合いが最後まで続きます。付け句のポイントは前句を解説するような句にならないこと。できるだけ離すことが大切で、無関係なイメージをポンともつてくるほうが選ばれる確率が高い」という長谷川のことばは、貴重なヒントになったはずである。

では、三氏による自作解説に早速耳を傾けようではないか。

【発句】

さし鹿の眼のうるむ闇の奥

小島ゆかり

発句は主への挨拶ということで、今回の主である辻原の最新小説『闇の奥』（文藝春秋）を意識して詠んだ



学生や俳句愛好者ら95人が参加した湘南連句

らしい。

『闇の奥』は、小人族伝説が物語に深くかわる、幻想的な色合いを帯びた作品。小島に発句の依頼があったころ、ちょうどこの辻原の最新小説に夢中になっていたという。

「作品を読みながら、現実と非現実との闇の奥に私自身が眼を凝らしているように感じられ、どうしても発句にその感じを表したいと考えました。そのころ、古歌のことも気になっていて、古歌に詠まれているさし鹿が浮かんできました」

さし鹿は若い牡鹿のこと。「さ」は接頭語。聖なるものや尊いものの頭に付くのだという。

「万葉集にもさし鹿と萩の歌が多く見られます。大伴家持が詠み、藤原俊成の歌にも萩群を「胸分けに」ゆく鹿の姿と、嵐のごとく散ってゆく萩を詠んだものがあります。また『闇の奥』を読んでいただければ分かりますが、作者は私たちの見えるものと見えないものの合わせ目の奥から、うっすらと何かを見ている。そういう作品世界を描いた主への賛辞です」

【脇句】

父の鞆に満月入れぬ

辻原 登